

日本語学習者にみられる日本語のジェンダー規範意識 —相手言語接触場面と第三者言語接触場面の談話分析から—

高橋美奈子・谷部弘子・本田明子

要 旨

日本語が「第三者言語」として使用される機会が増えている現在、第三者言語接触場面における実証的な研究の必要性は高い。本稿では、実態と意識との乖離が指摘されているジェンダー規範を取り上げ、日本語学習者がどのようなジェンダー規範意識をもっているのかについて、相手言語接触場面と第三者言語接触場面を比較し明らかにする。分析に使用したデータは、留学生の日常談話データおよび意識を明らかにするための半構造化インタビューである。結果として、学習者は来日前から日本語のジェンダー規範についての知識があり、規範を肯定的にとらえていた。しかし、実際の言語使用においては、意識と異なり、規範にとられない自由な言語使用がみられた。中には、第三者言語接触場面より相手言語接触場面の方が日本語のジェンダー規範を順守しようとする言語使用もあった。学習者のもつ規範意識と実際の言語使用との複層性にどう向き合うか、日本語の教育に携わる者の意識が問われている。

キーワード：第三者言語接触場面、相手言語接触場面、自然談話、ジェンダー規範

1. はじめに

多言語多文化社会に進みつつある現代においては、英語だけに限らず、日本語も非母語話者間で話される「第三者言語」として使用される機会が益々増えている。接触場面研究では、母語話者同士が接触を持つ「母語場面」に対し、非母語話者が母語話者と接触を持つ場面を「接触場面」と呼ぶ。1980年代にネウストプニー（1981）が「外国人場面」と名付け、その概念を提唱したことに始まるが、その後、ネウストプニーの流れをくむファン（1999、2006）が、接触場面をその場で使われる接触言語によって3つの場面に分類した。1つ目は母語話者（native speaker、以下 NS）と非母語話者（non-native speaker、以下 NNS）による「相手言語接触場面」（以下、相手場面）で、

2つ目は非母語話者同士による「第三者言語接触場面」（以下、第三者場面）、3つ目はアメリカ英語話者とイギリス英語話者のように外国人性は意識されながらも双方が第一言語を使用する「共通言語接触場面」である。

接触場面の研究は非母語話者の言語使用実態の把握に有効であると言われている。とりわけ、日本語教育の教室場面では、大部分が日本語学習者同士の第三者場面であり、海外の教室場面に目を向けると、教授者も非母語話者が多いことから、第三者場面の頻度は高い。よって、第三者場面の解明は日本語教育研究において他の場面より必要性が高いと思われる。筆者ら研究グループは、第三者場面での言語使用を日本語教育に取り入れることの有効性を明らかにすることを目的に、これまで相手場面にはない第三者場面の意義について、意味交渉の仕方（本田・谷部・高橋2014）や談話の構造（谷部・高橋・本田2015）、スピーチレベルシフトの機能（高橋・谷部・本田2017）の観点から考察してきた。しかしながら、第三者場面における言語規範意識にかかわる実証的な研究は十分とは言えない。

第三者場面では、相手場面とは異なる次のような言語規範意識があると言われている（ファン1999、2003）。

- （1）日本語の規範を緩める。
- （2）母語の規範を適用する。
- （3）相手の母語の規範を試みる。
- （4）新しい日本語の規範を創る。

ファン（1999、2003）によると、第三者場面は話者間の言語能力差が顕著ではないことから、参加者間には言語ホスト・ゲストの関係性が成立せず、参加者は、異言語接触におけるインターアクション上の言語問題を解決することより、上手に会話を維持することを目指すという。そのため相手場面にはみられない上記（1）から（4）のような言語規範意識を活用することで、積極的に目標言語で会話に参加できる可能性も示唆されている（ファン2011）。

そこで本稿では、実態と意識との乖離が指摘されているジェンダー規範を取り上げ、学習者の規範意識を検証するためジェンダー指標形式に着目し、日本語学習者がどのようなジェンダー規範意識をもっているのかを明らかにする。

2. ジェンダー規範

佐竹 (2018: 44) によると、日本語社会は「女と男に別々の行為規範 (ジェンダー規範) にのっとったふるまいを要請」し、中でもことばの使用については、「日本語には女 / 男それぞれの特性にふさわしい別々のことばづかいがある」とするもので、次の二つの項目からなるという。

- ①<女ことば>の丁寧規範： 男はぞんざいな形式 (<男ことば>) を用いてもよいが、女は丁寧な形式 (<女ことば>) を用いるべきである。
- ②性差形式規範： 日本語には女専用の言語形式 (<女ことば>形式) と男専用の言語形式 (<男ことば>形式) がある。

上記②のそれぞれの性別の言語形式として、日本語では次の形式が主に挙げられる (益岡・田窪1992、鈴木1993)。

<女ことば>形式： 自称詞「あたし」、感動詞「あら、まあ」、
文末表現「わ↑、かしら、だわ、わね、わよ、よ (「だ」を省略したものに接続する場合)」

<男ことば>形式： 自称詞「おれ、ぼく、おいら、わし」、
対称詞「おまえ、きみ」、感動詞「おい、こら」、文末表現「ぞ、ぜ、か、よ (述語の普通体に接続する場合)、だ (判定詞)」、命令形、禁止形

本稿では上記形式を、性別を指標する形式として「ジェンダー指標形式」と名付ける。これらのジェンダー指標形式については、実際の NS による使用が話し手の生物学的性別と必ずしも一致していないことから、母語場面においても実態と意識の乖離が指摘されている (現代日本語研究会編2011、遠藤他編2016)。では、NNS のジェンダー規範における実態と意識はどうか。本稿では、NNS による第三者場面と相手場面の自然談話に現れるジェンダー指標形式を分析し、インタビューにみられるジェンダー規範意識と比較して、それぞれの場面における使用実態と意識について検証する。

3. 研究の方法

研究対象者は、2013年秋に来日した留学期間が約1年間の短期留学生（以下、「学習者」）計8名である。彼らは大学の国費留学生および交換留学生であり、出身地域は、ヨーロッパ地域（スペイン・フランス・ポーランド）・アジア地域（韓国・タイ・中国）と多様である。

分析に使用したデータは2種類あり、一つは、来日後2か月以内及び帰国前（来日後約10か月）に学習者の日常談話を録音してもらい文字化したもので、もう一つは、同じく来日後と帰国前に、彼らの意識を明らかにするために行った半構造化インタビューによる調査結果である。談話は、学習者とNSとの相手場面での会話と学習者とNNSとの第三者場面での会話をそれぞれ15～30分録音してもらった。会話の相手は、学習者の知り合いあるいは親しい友人に学習者自身で依頼してもらったので、初対面の相手との談話ではない。また、学習者の日本語能力はおおむね中上級レベルである。自然談話データからは、相手場面と第三者場面に現れるジェンダー指標形式を抽出し、使用実態を明らかにする。さらに、インタビューデータからはジェンダー規範意識を検証する。

4. インタビュー調査（来日時）の談話からみるジェンダー規範意識

まず、日本語の＜女ことば＞＜男ことば＞について、来日時の学習者はどの程度知っているのか、また、それらのことばの使用についてどう思うか⁽¹⁾をインタビュー調査した。結果として、日本語の＜女ことば＞＜男ことば＞については、来日時であっても全員「知っている」と回答した。それらの使用について出された意見は次の通りである。

表1 女性学習者によるインタビュー調査の回答（（ ）は学習者のコード名）

- ・昔は＜男ことば＞が好きだったが、やっぱり聞いている人の気持ちを考えるようになってやめるようになった。ホストブラザーが「おれ」を使っていたので覚えて使うようになっていた。アニメで「～ぜ」「～ぞ」がかっこよかったから。でも、＜女ことば＞は自分に似合わないと思うから使いたくない。（学習者1）
- ・[自分の国] では＜女ことば＞＜男ことば＞を勉強したことがある。＜女ことば＞は「～わ」、＜男ことば＞は「～ぜ」など。実際、「おれ」とか「ほく」とかはよく聞く。女性だから＜女ことば＞を使いたい。＜女ことば＞と＜男ことば＞ははっきりした方がいいと思う。（学習者2）
- ・日本語の＜女ことば＞＜男ことば＞は便利だと思う。文章ではあまり使わないけど、テレビや本のセリフでは、すぐに男性か女性かを区別できる。[自分の母語] ではパッと見ではわからない。また、かわいい印象やかっこいい印象がある。でも、「ワンピース」のような少年マンガで日本語を勉強した留学生が、主人公の男の子のことばをそのまま使ったりする女の子や、女の子のことばを使う男の子がいて、面白いが違和感を感じる。今は女性語を使いたいと思っている。日本語を勉強し始めたばかりのころは、見分けられなくて＜男ことば＞を使っていたかもしれない。（学習者3）

表2 男性学習者によるインタビュー調査の回答（（ ）は学習者のコード名）

- ・女の人と男の人と話すときは「[男女一緒に話すときは]の意味」「ほく」を使う。男の人と話すときは「おれ」を使う。「わたし」は先生や知らない人と話すとき。（学習者5）
- ・女性のトーンは元気だと思う。＜男ことば＞は「ほく」「おれ」、＜女ことば＞は「わたし」、日本語の＜女ことば＞＜男ことば＞は面白いと思う。ときどき「ほく」を使っているけど、「おれ」は失礼なので使わない。日本では気を付けている。＜男ことば＞は使っていきたい。ある女の人は、かわいいイントネーションを使っている。（学習者6）
- ・[自分の国] で習うのは「先生が女の先生ばかりだったから」ほとんど＜女ことば＞ばかりだった。日本に来てから、どうやって男性っぽく話せるか勉強したかった。区別は微妙。自分は女性っぽく言いたくない。「おれ」をよく使う。「わたし」は使いたくない。（学習者7）
- ・よく使われている「おれ」を女性が使っていたが、変に聞こえた。使わない方がいい。できるだけ標準語を使うようにしている。言語のレベルが高ければ自然に使えと思う。友だちには「ほく」を使う。「おれ」は自分にはあっていない。（学習者8）

学習者による回答をみると、日本語ジェンダー規範については来日前に母国で知る機会があり、主な形式である自称詞「ほく」「おれ」や終助詞「～ぜ」「～ぞ」「～わ↑」などは知っている学習者が多い。また、女性学習者1を除いて、＜女ことば＞＜男ことば＞については、「便利だ」「男女の区別ができる」「好き」「使いたい」「面白い」等の肯定的な評価が多数を占めた。反対に、ジェンダー規範に反する言語使用については、「違和感を感じる」「変に聞こえる」「使わない方がいい」等の否定的な意見がみられた。このように回答する背景には、アニメや漫画等のメディアの影響だけでなく、実際に学習者が接触したNSであるホストブラザーや教師の言語使用に対する感じ方が学習者のジェンダー規範の形成に影響を与えていることが回答からもわかる。

回答者の中で、日本語ジェンダー規範に従った言語使用に否定的なのが女性学習者1である。学習者1だけは、「＜女ことば＞は自分に似合わないと思うから使いたくない」と述べており、ジェンダー形式が指標するイメージと自分自身が有するイメージとの異なりを自覚している。学習者1の実際の談話場面に出現した言語形式について先に述べると、自称詞、対称詞、感動詞、文末表現、いずれも、意識と一致して女性指標形式の使用はみられなかった。

5. 相手場面と第三者場面の自然談話からみるジェンダー規範意識⁽²⁾

5.1 自称詞

来日時と帰国時の各場面の談話内における自称詞の出現状況は表3の通りである。

表3 学習者の自称詞出現状況（（ ）内の数は出現頻度）

コード (性別・出身国)	相手場面		第三者場面	
	来日時	帰国時	来日時	帰国時
学習者1 (女・タイ)	わたし (12) わたしたち (4)	わたし (14) わたしたち (5)	わたし (13)	わたし (22) わたしたち (1)

学習者2 (女・中国)	わたし (10)	わたし (17) わたしたち (5)	わたし (24) わたしたち (2)	わたし (15) わたしたち (1)
学習者3 (女・韓国)	あたし (1) わたし (13) わたしたち (2)	わたし (9) わたしたち (2)	わたし (13) わたしたち (4)	わたし (16) わたしたち (6)
学習者4 (女・フランス)	わたし (25) わたしたち (4)	わたし (14)	わたし (26)	わたし (42) わたしたち (1)
学習者5 (男・スペイン)	わたし (10)	わたし (7)	わたし (13)	わたし (6)
学習者6 (男・スペイン)	わたし (6) おれ (1) ぼく (4)	おれ (19) ぼく (1)	わたし (11) ぼく (8)	おれ (12)
学習者7 (男・ポーランド)	おれ (9)	わたし (2) おれ (3) ぼく (4) おいらたち (1)	おれ (10) ぼく (1) ぼくらたち (1)	わたし (2) おれ (4) ぼく (1)
学習者8 (男・ポーランド)	わたし (2) ぼく (5) ぼくら (1) ぼくたち (1)	ぼく (3)	ぼく (7)	わたしたち (1) ぼく (8) ぼくたち (3)

表3をみると、女性学習者については学習者3の「あたし」の使用1例を除くと、場面や時期の違いにかかわらず、「わたし」（「わたしたち」）のみを用いている。

男性学習者の使用状況については、次の4つに分けられる。1つ目は、女性学習者のように「わたし」のみを使う（学習者5）、2つ目は場面の異なりはないが、来日時より帰国時にジェンダー規範に則した使用をする（学習者6）、3つ目は、来日時はジェンダー規範に則った使用をしているが、帰国時にはその規範が緩やかになる（学習者7）、4つ目は第三者場面より相手場面よりジェンダー規範を順守しようとする（学習者8）。

まず、「わたし」のみを使用していた学習者5であるが、表2の来日時のインタビューでは、「女の人と男の人と話すときは「ぼく」を使う。男の人と話すときは「おれ」を使う。「わたし」は先生や知らない人と話すとき」と回答したにもかかわらず、いずれの場面においても自称詞の使用は「わたし」のみであった。フェイスシートでは、対話者との関係性はいずれも「友人」と回答している。

このように意識と実際の言語運用が異なるのは学習者5のみでなく、学習者6と7も同様である。学習者6は、来日時と比べると帰国時によりジェンダー規範に則った自称詞使用をしていた学習者である。学習者6は、インタビューでは「ときどき「ぼく」を使っているけど、「おれ」は失礼なので使わない。日本では気を付けている。＜男ことば＞は使っていきたい」と回答していたが、実際の帰国時の談話では、いずれの場面でもほぼ「おれ」のみを使っていた。

学習者6と同様に、インタビューでは「自分は女性っぽく言いたくない。「おれ」をよく使う。「わたし」は使いたくない」と回答していた学習者7であるが、学習者6とは異なり、帰国時は男性指標形式である「おれ」と「ぼく」の使用に限定されず、使いたくないと言っていた「わたし」の使用がみられるなど、より日本語のジェンダー規範の順守が緩やかになっていた。こうしてみると、意識では共通して日本語のジェンダー規範を順守したい思いがありながらも、実際の言語使用をみると、前掲したファン（1999、2003）で明らかにされた第三者場面における言語規範意識よりも複雑な様相を呈することが分かった。

最後に、第三者場面より相手場面でよりジェンダー規範を順守しようとした学習者8の使用例を考察する。学習者8は、表2のインタビューでは、「友だちには「ぼく」を使う。「おれ」は自分にはあっていない」と回答していたが、表3をみると、意識とのズレはみられず、主に使用している自称詞は「ぼく」である。次の談話例1（来日時の相手場面）では、「わたし」の使用が2例（発話文156と609）みられたが、いずれの例においても、「わたし」と言った直後に「ぼく」と言い直しており、無標の「わたし」ではなく、男性指標形式の「ぼく」を使おうという意識がみられる。

談話例⁽³⁾ 1：学習者8（男）・来日時・相手場面

発話番号	話者	発話
154	NS	じゃあ、[国名1] 人★だけ、テント<笑い>。
155	8	→ば、 <u>ぼく</u> 、 <u>ぼく</u> 、[笑いながら] <u>ぼくら</u> は我慢←でき ると思うけど<笑い>。

→	156	8	なんかもっと安くなるように [笑いながら]、あの、 <u>わたし</u> 、あの、 <u>ぼくたち</u> 、あの、[友人1の名]と一緒に、あのテントを張って、そこに泊まって、あの、みんなは旅館で<笑い>。
	157	NS	それも楽しい。
	158	8	<ウフフ (笑い) >楽しいね。
(中略)			
	603	NS	<沈黙6秒>え、じゃ、帰ったら? ↑。
	604	NS	あ。
	605	8	卒業式。
	606	NS	あ、え、すぐ? ↑。
	607	8	そう、そう。
	608	NS	ああ、ああ、[友人1の名]? ↑。
→	609	8	ううん、★ <u>わた</u> 、 <u>ぼく</u> 。
	610	NS	→##←。
	611	8	[友人1の名] もう//。
	612	NS	あー [友人1の名]、★もう卒業してるんだ。

しかし、学習者8は、第三者場面の帰国時談話でも「わたしたち」の使用がみられるが、相手場面のような言い直しはしていない。

談話例2：学習者8（男）・帰国時・第三者場面

	発話番号	話者	発話
→	410	8	なんか、 <u>わたしたち</u> の一、ふるよう [古い寮] は、
	411	NNS	うん。
	412	8	最も一、高いよね。

談話例2のやりとりの前の発話では「ぼくたちが言われたのは、ただ、できそう、うふふっ。(発話番号59)」という「ぼくたち」を使用した発話があった。つまり、相手場面と第三者場面を比べると、相手場面では第三者場面より日本語のジェンダー規範を順守しようとする言語使用が現れている一方で、第三者場面ではジェンダー規範にとらわれない多様な自称詞使用がみられた⁽⁴⁾。

5.2 文末表現

次に、来日時と帰国時の各場面の談話内における発話文末の文末表現の出現状況を表4に示す。

表4 学習者の文末表現の出現状況（（ ）内の数は出現頻度）

コード (性別・出身国)	相手場面		第三者場面	
	来日時	帰国時	来日時	帰国時
学習者1 (女・タイ)	～だよ (2) ～よ (5) ～か (1)	～だよ (2) ～よ (9) ～だ (2) ～か (1)	～だ (1) ～よ (9) ～だよ (5)	～だよ (1)
学習者2 (女・中国)	～だよ (2) ～よ (21) ～か (2)	～よ (5) ～だ (2)	～だよ (2) ～よ (23) ～か (2) ～だ (2)	～だよ (3) ～よ (5) ～か (3) ～だ (4)
学習者3 (女・韓国)	～よ (4) ～だよ (3) ～か (15) ～だ (2)	～よ (4) ～だよ (2) ～か (2) ～だ (3)	～よ (10) ～だよ (1) ～か (1)	～よ (2) ～だよ (1) ～だ (3) ～か (5)
学習者4 (女・フランス)	～だよ (3) ～よ (5) ～だ (1) ～か (2)	～わね (1) 引 ～だよ (1) ～だな (1) ～よ	～だよ (7) ～だ (7) ～よ (11) ～か (10) 禁止形 (1)	～ぞ (3) ～よ (4) ～だよ (2) ～だな (3) ～か (11) ～だ (5)
学習者5 (男・スペイン)	使用なし	～だ (7) ～よ (4) ～か (6)	～だ (2) ～よ (1)	～だ (6) ～よ (5) ～か (12)
学習者6 (男・スペイン)	～よ (4) ～だ (8)	～だろ (2) ～だよ (2) ～よ (7) ～だ (8) ～か (13)	～よ (4) ～だ (3) ～か (1) ～だよ (1)	～よ (2) ～だ (4) ～か (5) ～だろ (1)
学習者7 (男・ポーランド)	～よ (4) ～か (5)	～だ (1) ～か (10)	～かしら (1) 引 ～だよ (1) ～か (4)	～だよ (2) ～か (1) ～よ (1)
学習者8 (男・ポーランド)	～だよ (1) ～よ (7) ～だ (1) ～か (2)	～よ (1) ～だ (1) ～か (2)	～だよ (2) ～よ (15) ～ぞ (1) ～ぜ (1) ～だ (2) 命令形 (1)	～だな (4) ～よ (1) ～だ (2)

※「引」は引用、「～よ」は＜女ことば＞形式の出現例が皆無だったため＜男ことば＞形式のみ抽出。

表4をみると、女性指標形式の終助詞使用は「かしら」1例と「～わね」1例の計2例のみであった。女性指標形式の終助詞については、尾崎（2011〔1997〕）が日本語母語話者の自然談話データを用いて調査しており、女性専用の文末詞は衰退の傾向がみられると指摘している。さらに、その20年後を調査した増田（2016）においても、その傾向はより顕著であることを示している。こうした母語場面における母語話者の言語使用の傾向は、表4をみると日本語学習者の言語使用についても言えそうである。

本調査で現れた女性指標形式の終助詞使用例についてみると、男性学習者7の第三者場面でみられた「かしら」は次の例のとおりである。

談話例3：学習者7（男）・来日時・第三者場面

	発話番号	話者	発話
	113	NNS	ぼくの考えでは、あの、標準語があまり、あのできないと、あの、そういう、あの俗語とか、あの、男らしい言葉は使わない方がいいと思うね。
	114	7	ほんと？↑。
	115	NNS	うん、そうそうそう。
	116	7	うーん。
	117	NNS	あの…、もし、あの、言語がああのペラペラ、あの、流暢にできたら、そういう、あ、あの時にあ {はあ [7]} の、えー、使いはじめるかなと思った。
	118	7	うーん、おれはなんか<笑い [複] >。
	119	NNS	構わない<笑い [複] >。
	120	7	構わん<笑い [複] >。
	121	7	あの、普通になんか、わざわざと、まあ、お、
	122	NNS	あ、わざわざ★ぞ、あの、冗談として使ったら、あの //。
	123	7	→おと、おと、おと、おと、男←だと強調するように使わないけど、どう言（ゆ）う、あの、女らしい言葉は使いたくないね。
	124	7	なにか {うん [NNS]}、先生にいつも教えられてる、ね、なにか、「いいわよ」↑【声のトーンを上げて】<笑い [複] > {そうそうそう【笑いながら】[NNS]}、とか言（い）いたくないよね。
	125	NNS	「どうかしら？」↑【声のトーンを上げて】。

→	126	7	どうか <u>かし</u> {ふん [NNS]} <u>ら</u> (=どうかしら) 【つぶやくように】。
	127	7	ね。
	128	NNS	ま、それにしても、ほ、ほくはあまり、あ、使いたくない。

学習者7とNNSが日本語の＜男ことば＞について話している場面で、彼らが使いたくない「女らしい言葉」の例として、「かしら」を「わよ」と一緒に挙げている。ここでの学習者7の「かしら」の使用は、「女らしいことば」を使う教師の発話をやや揶揄するかのような引用として用いられている。学習者7は、表2で示したインタビュー調査でも「[自分の国]で習うのはほとんどく女ことば」ばかりだった。日本に来てから、どうやって男性っぽく話せるか勉強したかった。(中略)自分は女性っぽく言いたくない」と述べているが、そのようなジェンダー規範を順守したいという意識は談話の中でも現れていた。

もう一つの女性指標形式「～わね」を使用したのは女性学習者4であるが、次の談話をみると、先ほどの談話例3と同様、先生の発話の引用として用いられたものである。

談話例4：学習者4（女）・帰国時・相手場面

	発話番号	話者	発話
	302	NS	あ、[学習者4の名]、ニュースとか見る？↑。
	303	4	ニュース、あんま見ないねー。
	304	4	駄目なんだよね {うん [NS]}。
	305	4	アクセントをちゃんとしないといけない。
	306	NS	アクセント、[先生の姓] 先生に怒られる＜笑い＞。
→	307	4	「あれ、高かった <u>わね</u> 」。
	308	4	あれはーいつも間違っ、いつもやり直すんだよね。
	309	NS	高かった。
	310	NS	でもちゃんと気づくからいいじゃん＜笑い＞。
	311	4	そう、でもー、最初から失敗してるんだよね。

学習者4については、第三者場面では相手場面にはみられなかった男性指

標形式の禁止形の使用 1 例（談話例 5）と「～ぞ」の使用 3 例（談話例 6）、過度な「～か」の使用（談話例 7）がみられた。

談話例 5：学習者 4（女）・来日時・第三者場面

	発話番号	話者	発話
	311	4	でも、先生厳しいと思う、★こういうの。
	312	NNS	→あー←、そう、そう、そう、あの先生、面倒くさい。
	313	4	<ハハハハ（笑い）[複]>。
→	314	4	「面倒くさい」言（ゆ）うな。
	315	NNS	面倒くさい<フッフ（笑い）>。
	316	4	駄目だよ。

談話例 6：学習者 4（女）・帰国時・第三者場面

	発話番号	話者	発話
	200	4	みんな、帰っちゃうからねー。
	201	NNS	うん、[友人 2 の名] も泣いちゃった。
	202	4	[友人 2 の名]、泣いちゃったの？↑。
	203	NNS	うん。
→	204	4	見れなかった <u>ぞ</u> 。
	205	NNS	<ああははは（笑い）>。
	206	4	残念<笑い>。

談話例 7：学習者 4（女）・帰国時・第三者場面

	発話番号	話者	発話
	314	4	なんか声、声きれいにし出せる授業はないかな？<笑い>。
	315	NNS	<笑い>。
→	316	4	あれー、ないの <u>か</u> 。
	317	NNS	<笑い>。
	318	4	はあー、残念。
	319	NNS	ああ。
→	320	4	ないん <u>か</u> 。
	321	NNS	うん。
	322	4	体力あげるとか、
	323	NNS	<うふふふ（笑い）>。
	324	4	スポーツする、ダンスとか。

	325	NNS	<ふふふふ（笑い）>。
→	326	4	ないのか、残念。
	327	NNS	うん。

こうしてみると、ジェンダー指標形式の文末表現の使用については、学習者の性別にかかわらず、「～だ」「～よ」「～か」といった男性指標の文末表現が用いられている一方で、女性指標の終助詞使用はみられず、学習者の意識とは異なり、実態は日本語母語話者の言語実態に近いことがわかった。また、場面間での使用に顕著な違いはみられなかったが、学習者4のように、第三者場面でのみ顕著な男性指標形式を使用する例もみられた。

6. 結果と考察

以上、「相手場面」と「第三者場面」の自然談話データにおけるジェンダー指標形式の使用実態と、インタビューに現れたジェンダー規範意識とを比較検討した。その結果、学習者は日本語のジェンダー規範を順守したいという意識を強くもちながらも、実際の言語使用は意識とは乖離した複雑な様相を呈していることがわかった。また、学習者の中には、第三者場面における談話のほうが、日本語母語話者の言語使用実態に近い学習者もいることが明らかになった。これは、前述のファン（1999、2003）の指摘にもある「日本語の規範意識を緩める」といった第三者場面特有の規範意識が、実は日本語母語話者の日常談話に近いということではないかと考えられる。先にも述べたように、日本語母語話者の自然談話においては、必ずしも規範が守られていないという実態が指摘されている（現代日本語研究会編2011、遠藤他編2016）が、学習者は母語話者と会話する場面においては過度に規範を意識してしまう。その結果、母語話者の自然談話とは異なる言語使用が生じる。相手場面において規範を過度に意識することが学習者の自然な談話進行の障害になるとすれば、自然な日本語談話を習得するうえでは、第三者場面を利用することには利点があると考えられる。学習者が「母語話者のように話す」ことを目指すべきかどうかということについては、議論もあるにしろ、母語

話者が抜け出しつつあるジェンダー規範のような従来の言語規範を学習者が順守すべきかということも疑問である。本研究によって示唆された第三者場面における学習者の規範に縛られない言語使用の実態を受け、また、一方では学習者には来日前から日本語のジェンダー規範意識が強固に根付いていることを踏まえ、教え手としてもこうした規範意識にどのように向き合うべきか考えていかなければならないだろう。

注

- (1) ここでの回答については、来日時の半構造化インタビュー調査の結果であるが、ジェンダー規範意識にかかわる質問については予め設定した項目に入れておらず自由質問の項目の一つであったため、8名の研究協力者のうち7名の回答しか得られていない。
- (2) 本章では紙幅の都合によりジェンダー指標形式の中の自称詞と文末表現のみ扱うが、データに出現した感動詞と対称詞は次の通りである。

学習者3（相手場面「あら」（1回））、学習者4（第三者場面「おまえ（ら）」（引用・4回））、学習者8（第三者場面「きみ」（1回））

- (3) 談話例1～8で用いた文字化記号の意味は次の通りである。

★：発話の途中で次の発話が始まった時点

→：前の話者の発話に重なった始まり時点

←：終わり時点

↑：目立った上昇イントネーション

//：発話の途中で次の話者の発話が始まり、「言いさし」で終わったことを示す。

#：聴取不能箇所1拍分

？：発話文が質問（問いかけ）、確認要求、疑いをあらわす疑問文

句点「。」：一発話文の終了

読点二つ「、、」：一発話文の途中であること

{ }：発話途中の聞き手のあいづち、その中の[]はあいづちを打った話者

=：改行される発話と発話のあいだに間がないことを示す。

- (4) 学習者8は、学習者6の帰国時の第三者場面の対話者であったが（次の談話例8

の NNS)、その場面においても「おれ」「ぼく」「わたし」といった多様な自称詞の語形をジェンダー規範にとらわれず使用していた例がみられた。

談話例 8：学習者 6（男）・帰国時・第三者場面（NNS：学習者 8・男）

発話番号	話者	発話
68	6	日研生のプログラム {ああ [NNS]} と違って、、
69	NNS	そうそう、そうそうそ、、
70	6	そう、ただ、おれの大学、、
71	NNS	あああ、、
72	6	のプログラム。
73	NNS	そ、そうだな、いいな。
74	6	うん、そうだね。
→ 75	NNS	おれの★大学はそういうプログラムないな。
76	6	→だ、今←、ああ、ああ、そうだね。
77	NNS	うん、ただ、日研生のプログラムしかない。
(中略)		
→ 255	NNS	あ、 <u>ぼく</u> も、なんかあの、授業取りたかったけどー、時間があまりないし {うん [6]}、断られたねー、なんか、中国語、受け {ああ [6]} たかったけど、
256	6	そ★っか。
257	NNS	→それ←は、まあ、研究テーマー、と関係がないって {そうなの [6]} 言われて、、
258	6	でもさ、、
259	NNS	できなかった★ね。
260	6	→2←組の人は受けてるよく笑い>。
261	NNS	うーん、★それは分かるね。
262	6	→他の授業とか←。
→ 263	NNS	ま、★ <u>わたし</u> の先生じゃなかったからね。
264	6	→例えば←、そう、でも、例えば、[友人 2 の名] ↑。
265	NNS	あは↑。
266	6	ほら、あの一、イギリスの、まあ、文学受けてる。
267	NNS	ああ。
268	6	日本人と一緒に。
269	NNS	うん、いいな。

参考文献

- 遠藤織枝・小林美恵子・佐竹久仁子・高橋美奈子編（2016）『談話資料 日常生活のことば』 ひつじ書房
- 尾崎喜光（2011〔1997〕）「女性専用文末形式のいま」現代日本語研究会編『合本女性のことば・男性のことば（職場編）』 pp. 33-58 ひつじ書房
- 現代日本語研究会編（2011）『合本 女性のことば・男性のことば（職場編）』 ひつじ書房
- 佐竹久仁子（2018）「ことばの規範とジェンダー—こどもたちが学ぶこと—」『日本語学』 37-4 pp. 44-54 明治書院
- 鈴木睦（1993）「女性語の本質—丁寧さ、発話行為の視点から—」『日本語学』 12-6 pp. 148-155 明治書院
- 高橋美奈子・谷部弘子・本田明子（2017）「第三者言語接触場面におけるスピーチレベルシフトの機能—日本語学習者同士の自然談話の分析から—」『ことば』 38 pp. 46-62 現代日本語研究会
- ネウストプニー、J.V.（1981）「外国人場面の研究と日本語教育」『日本語教育』 45 pp. 30-40 日本語教育学会
- ファン、S.K.（1999）「非母語話者同士の日本語会話における言語問題」『社会言語科学』 2-1 pp. 37-48 社会言語科学会
- ファン、S.K.（2003）「日本語の外來性（foreignness）：第三者言語接触場面における参加者の日本語規範および規範の管理から」宮崎里司・マリオット、ヘレン編『接触場面と日本語教育 ネウストプニーのインパクト』 pp. 3-21 明治書院
- ファン、S.K.（2006）「接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題」国立国語研究所編『日本語教育の新たな文脈』 pp. 120-141 アルク
- ファン、S.K.（2011）「第三者言語接触場面と日本語教育の可能性」『日本語教育』 150 pp. 42-55 日本語教育学会
- 本田明子・谷部弘子・高橋美奈子（2014）「日本語母語話者との会話で何が学べるか—非日本語環境における学習者の日本語習得の特徴—」『シドニー日本語教育国際研究大会2014』 <https://icjle2014.arts.unsw.edu.au/jp/program>

- 益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版
- 増田祥子（2016）「第7章 女性文末形式の使用の現在—『女性のことば・職場編』調査と比較して—」遠藤織枝・小林美恵子・佐竹久仁子・高橋美奈子編（2016）『談話資料 日常生活のことば』pp. 131–154 ひつじ書房
- 谷部弘子・高橋美奈子・本田明子（2015）「日本語環境は短期留学生の対話能力にどのような作用を及ぼすか」『ヨーロッパ日本語教育20』（第19回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム報告・発表論文集2015）pp. 237–242

付記：本研究は、平成28～30年度科学研究費補助金基盤研究（C）「日本語学習者談話の有効性に関する研究」（課題番号16K02817、研究代表者 高橋美奈子）の助成を受けた研究成果の一部である。また、本稿は、「Venezia 日本語教育国際大会（ICJLE）2018」でのポスター発表「日本語学習者にみられる日本語のジェンダー規範意識—相手言語接触場面と第三者言語接触場面の談話分析から—」（発表者：高橋美奈子・本田明子・谷部弘子、2018年8月4日発表）の内容を見直し、発表時に得られた意見を踏まえ、加筆修正をしたものである。

（たかはし みなこ：琉球大学）

（やべ ひろこ：東京学芸大学）

（ほんだ あきこ：立命館アジア太平洋大学）

（2019.11.3 受理）